２０２３（令和５）年度　道徳学習指導研究委員会
研究のまとめ

一　テーマ

子ども達が「道徳的価値を深め合う」指導の工夫　～多面的・多角的に考えるための手立てとは～

二　テーマ設定の理由

道徳教育において、子どもたちがさまざまな道徳的な価値に触れることが重要だと考える。一方的な見方・考え方ではなく、対話的な学びを通して、子どもたち同士の交流を図りながら、「道徳的価値を深め合う」ために、委員会では「多面的・多角的な考え方」が特に重要だと考え、このテーマに決定した。

三　研究の経過

研究は主に、①公開授業の参観と授業研究会への参加、②各自の授業実践、③委員同士の情報交換、の３つの方法によって進めた。今年度はコロナによる規制も緩和され、授業の参観や授業研究会への参加など、直接顔を合わせて話す機会が昨年度より多くなった。また、オンライン会議も定期的に実施し、委員同士の情報交換も行うことができた。

教育課程研究協議会では、研究協議Ⅱの準備運営と当日の司会を行った。研究協議Ⅱでは、それぞれの実践や授業での悩みを持ち寄り、グループトークを行った。

四　研究の内容

「子ども達が『道徳的価値を深め合う』」にはどのような指導の工夫ができるかを考え、特に「多面的・多角的な考え方」ができるような手立てについて重点をおき、研究・実践を行った。

１．小規模校における『全校道徳』の授業づくりと実践
～生徒の実態と身につけたい内容項目の関連を重点に～

（菅平中　山崎）

１　生徒の実態

本校は全校生徒 25 名（中１：10 名、中２：８名、中３：７名）の小規模学校で小中併設校でもあり、小学校入学から９年間（保育園入学からだと 12 年間）少人数集団で生活している。中学校では全員担任制（中学校教員がすべてのクラスの担任となり、給食指導や面談、生徒指導などを行う。保護者連絡などを行う各学年の業務担当が設定されている）とし、生徒達も全校で朝の会を行ったり、総合的な学習の時間に取り組んだりしている。また、特別の教育課程を編制し、英会話科を小１・２と中全学年で、スキー科を小中全学年で実施しており、地域の特性を生かした学習に取り組んでいる。

そのような生徒達は、日常生活や学習場面などにおいて下記のような前向きなよい姿が見られる。

①授業に集中して真剣に取り組む　②全校で年齢の関係なく同級生や後輩、小学生などを気遣って助けたり、自分から率先して動いたりすることができる　③自分の考えをもち、周りに発信することができる　④自分達の学校生活の実態と現状のルールについて考え、改善していこうとする

一方で、下記のようなこれから改善していきたい姿も見られる。

⑤人間関係の固定化による友人に対する印象の固着（この人は〇〇な性格など）　⑥友人や教員との適切な関わり方（距離感）や言葉遣い　⑦自己肯定感・自己有用感をもちづらい生徒がいる　⑧少人数がゆえにクラス内での学習では多面的・多角的な考え方の深まりに限界がある

このように、小規模校かつ地域の特性を踏まえた生徒達の姿を踏まえ、すべての日常生活と教科と連携して取り組める道徳科を軸に、生徒のよい姿を伸ばしたり、改善したりするために授業改善の手立てを検討した。

２　授業改善の手立て

１①～⑧の姿から小規模校である本校の特色を生かし、

・多様な価値観に触れる場面を増やすため、中学校全教員が学期ごとに授業するクラスを替えながら全学年にて授業を行う。【①③⑧】
・全校で考え、多面的・多角的な考え方に触れるよさを味わう場面を増やすため、１～２か月に１回の全校道徳を位置づける（資料１）。また、毎回の授業者は中学校教員が交代で担当し、内容項目の配列に関しては個人→友達→集団となるようにする。【①②③⑤⑧】
・生徒一人一人が持っている道徳的価値の幅を広げるため、全校道徳では異年齢集団（グループ）を人間関係を踏まえて編成し、全校で話し合う活動に取り組む。【②④⑥⑦⑧】
・全校で扱うことにより、道徳的価値の理解が深まり、広がるであろう主題および題材を設定する。【③⑧】

といった手立てが有効ではないかと考えた。昨年度以前は不定期に「全校道徳」を実施していたが、系統的かつ継続的に取り組むことに課題を感じており、本年度は年間を通して全校道徳を実施することとした。

また、１①～⑧の姿から、生徒に特に身につけてもらいたい内容項目を検討した。

Ａ（３）　向上心、個性の伸張【①③⑦】
自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして向上心、 充実した生き方を追求すること。
Ｂ（７）　礼儀【④⑥】
礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること。
Ｂ（８）　友情、信頼【②⑤】
友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。
Ｂ（９）　相互理解、寛容【③⑤⑥⑧】
自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと。
Ｃ（10）　遵法精神、公徳心【④⑤⑥】
法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること。
Ｃ（15）　よりよい学校生活、集団生活の充実【②④⑥】
教師や学校の人々を敬愛し、学級や学校の一員としての自覚をもち、協力し合ってよりよい校風をつくるとともに、様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること。

以上のように、年間を通した計画と生徒の実態から検討した内容項目を踏まえた道徳科の授業を全校で実施することにより、道徳的価値の理解が深まり、広がるであろうと考えた。年度の道徳開始時にはオリエンテーションを行い、全校で道徳の授業で深めていきたいことを扱っている（資料２）。ここからは、今年度６月に実施した授業の様子を通して成果と課題を述べる。

３　授業の実際

（１）扱った教材とその道徳的価値　　※　本時案は資料３を参照

本時ではジョハリの窓を用いて、生徒が自分自身のよさ（自己による評価）を考えると同時に、自分では気づけない友達から見たときのよさ（他者からの評価）を知る場面を設定した（資料４）。そして、友達のよさをグループや全校で共有したり、自分で自分のよさを捉え直したりすることにより、

お互いのよさを見つけて自己肯定感を高めると同時に、今まで以上に自分のよさを多面的・多角的に捉え、伸ばしていこうとする態度の育成を狙った。

本教材は中学校１学年の教科書（光村図書）に掲載されている内容で、現在の２、３学年は既習の内容だったが、実施時は各学級内（２年生８名、３年生７名）での活動であった。また、２、３学年の生徒達は１、２年前の自分との変化を知り、成長を実感する場面につながることも期待した。

（２）指導上留意したこと

・本教材は、自分のよさを考えることや友達のよさを伝えることについて恥ずかしがって取り組みづらい生徒の姿が想定された。そのため、自分で考える「自分のよさ」については学習カードにおいて紙面で記入できるようにし、周囲には見せる必要がないこと伝えた。また、「友達のよさ」については口頭で伝えるのではなく、付箋を活用した。

・全校でのグループ編成は、日常生活での関わりが近い関係、遠い関係などを踏まえて異年齢集団となるように４～５人１グループを６つ作り、当日の朝、生徒に連絡をした。また、教師もよさを見つける視点をサポートする役として各グループ１名配置した。

・学習カードに載せる「よさ」の例は教科書に載っている内容を基本とし、本校生徒の実態に合わせて加筆・修正したものとした。

（３）授業中の姿から

授業が始まると生徒達は、予想していた以上に活発なやり取りを行い、自分のよさに改めて気づく姿が見られた。例えば、中学２年生のＡ生は普段はあまり自信がなく、自己肯定感が低いだろうと推察される生徒で、授業のはじめ、「自分のよさなんて分からない」「書けないよ」とつぶやいていた。そこに、同じグループの後輩であるＢ生から、「かっこいい。部活も頑張っている」とＡ生のよさを教えてもらうと、「そうか、それもよさなのか」「（こんなによいことを言ってくれる）いい後輩だなあ」と表情を明るくしながら周囲に伝えた。その後、自分のよさと同じグループの仲間のよさを付箋に書き進め、隣のグループの仲間のよさも付箋に書いて手渡していた。Ａ生は授業の終末、自分では気づいていない「よさ」を知ってどんなことを思ったのかについて、「自分はこんな『よさ』があるんだなって思った。また、こんないい後輩がいるんだなって思った。今後もみんなが書いてくれた自分の『よさ』をずっと（周囲の友達から）思われるようにして学校生活を送りたい」と書いていた（図１）。

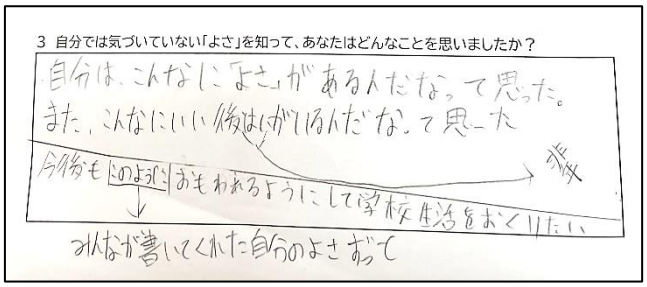


図１　Ａ生の学習カード

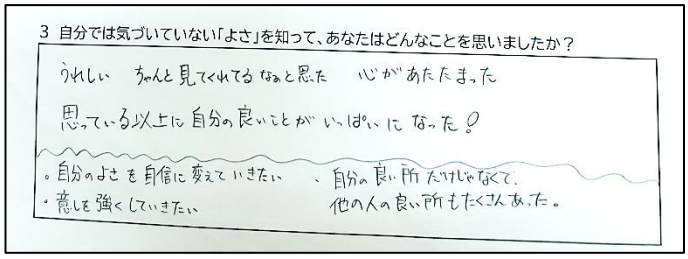


図２　Ｃ生の学習カード

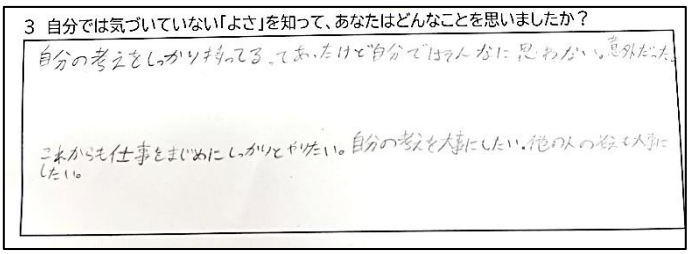


図３　Ｄ生の学習カード

また、中学１年生のＣ生は普段から周囲に気を配り、困っている仲間がいれば率先して行動することができる生徒である。このＣ生はグループ内の仲間とよさを見つけ伝え合うやり取りをし、授業の終末では、「うれしい。ちゃんと見てくれているなぁと思った。心が暖まった。思っている以上に自分のよいことがいっぱいになった！」と書いていた（図２）。

そして、中学３年生のＤ生は、責任感も強く、生徒会役員を務めている生徒である。小・中９年間過ごしてきた仲間とよさを見つけ合った授業の終末には、「自分の考えをしっかり持っているって（付箋に書いて）あったけど、自分ではそんなに思わない。意外だった。これからも仕事をまじめにしっかりとやりたい。自分の考えを大切にしたい。他の人の考えも大切にしたい」と書いていた（図３）。

４　成果と課題

編制したグループすべてで活発なやり取りが行われ、男女間や普段あまり関わらない関係の仲間ともよさを見つけ合い、付箋を交換し合うことができた。以上のような授業の様子から、成果（〇）と課題（▲）を考察する。

〇全校で異年齢集団となるようにグループ編成をしたことにより、クラス内での活動だけでは難しかった多様な考え方に触れることができ、生徒一人一人の道徳的な価値が広がったり、深まったりすることにつながった。

〇普段の生活では気がつくきっかけが少なかった「自分のよさ」を知り、新たな自分のよさとして自信を持つ姿が見られた。

▲自分のよさを具体的にどのように生徒達が自分の生活に生かすことができるか、について問い返すことが不十分だったため、「よさを知れたことがよかった」といった捉えにとどまる姿が見られた。

〇▲今回はＳＳＴ形式での授業に取り組み、内容項目に近づく姿が見られた。今後、全校道徳の計画に沿って内容項目を意識した授業を進めると、どのような姿が見られるか検証していきたい。

資料１　全校道徳年間実施計画

月	内容項目	教材名
４月	定めない	道徳オリエンテーション
６月	Ａ（３）向上心、個性の伸張	友達と、お互いの「よさ」を見つけ合う活動をしよう
７月	Ｂ（７）礼儀	ある朝の出来事
９月	Ｂ（９）相互理解、寛容	アイツとオレ
１０月	Ｂ（８）友情、信頼	自分と仲間のパーソナルスペースを知ろう
１２月	Ｃ（15）よりよい学校生活、集団生活の充実	菅平中の「人権宣言」を考えよう
３月	定めない	１年間の道徳を振り返って

資料２　全校道徳オリエンテーション（抜粋）

1　道徳の授業で考えること

①よりよい「自分」を考える

誰もが今の自分より、よりよい自分になりたいと願っています。
例えば、自分が誰かに親切にされたり、思いやりのある言葉をかけられたり、行為をされたりすると自分も「あの人のようになれたらなぁ」と思うものです。
あるいは、一生懸命に学習や係の仕事、部活動に打ち込んでいる人を見て、「素晴らしいなぁ」と感じるものです。このように道徳では、自分としてどんな生き方がよいのかを真剣に考えていきます。

②周りの人との望ましい関わり方を考える

私たちは生きていく以上、家族・友達・先生・先輩後輩・近所の人・職場の仲間といった自分以外の人間と常に何らかの関わりをもって生きていかなければなりません。
しかも、自分の考えと周りの人と考えが違ったり、立場が異なったりと自分が思うように物事が進まないこともよくあります。
こうした場合に、相手のことを考え、協力して、尊重し合って生活していくことが大切になります。こうした周りの人との関わり方を考えていきます。

③集団の一員としてのあり方を考える

私たちは、家族・学校・地域社会・国・国際社会などの集団の中で何らかの役割・分担をもって生きています。そして、自分の責任や義務をどう果たすかをお互いに考えながら生活しています。
授業では、こうした集団のなかの責任や義務とは何なのか、なぜ必要なのか、どう果たすべきなのか、さらにはどんな集団がよいのかを考えていきます。

④自然や美しいものについて考える

人間との関わりだけでなく、美しい自然や絵や建物など、人間が作り出した美しいもの、素晴らしいものを見て、感動し、何かを学び、励まされて私たちは生きています。
こうした人間以外のもの・ことに対しても、その値打ちやその良さをどう大切にしていけばよいのかを考えていきます。

授業では、何か１つ答えを出すのではありません。

①から④までに関わって、クラスの仲間や先生と一緒にいろんな見方や多くの思い、考えなどを出し合う中で、自分の考えを大切にし、自分の考えを少しでも授業の前より深めていくことに、道徳の授業のねらいがあります。

2　道徳の授業で大切にしたいこと

道徳の授業では、主に資料に基づいて話し合うことを多く行います。そして、資料の中の登場人物の考え方や生き方について、自分が思ったこと、仲間の考えたことをお互いに発表し合います。
授業では次のことを大切にしていきます。

①資料をしっかりと読む
あらすじだけが分かったからといって、安易に登場人物の気もちや考えを類推せず、文章から分かることをしっかりと読み取ろう。

②思ったことや考えたことを発言に生かす
頭の中で考えても、言葉にするとうまく言えないことがあります。クラスの仲間に分かってもらえるように積極的に発言することが大切です。
そのためには、自分の考えを頭の中できちんとまとめ、相手に伝わるように表現してみましょう。

③自分の考えに自信をもつ
道徳の授業に答えはありません。２６人いれば２６通りの理解の仕方があり、考え方があります。自分の考えに自信をもって発表しましょう。道徳の時間は、みんなの発言で進んでいきます。

④発言と普段の生活を比較しない
道徳の授業でも資料について思ったことを素直に表現しましょう。例えば、「普段、掃除がしっかりできていないから、掃除を扱った資料では自分は発言できない」と考えるのではなく、誰もが自分の弱さを認めて、少しでもよりよい「自分」を目指そうとしているので、遠慮せずに発言していきましょう。

⑤授業で深めた考えを文章化する
授業での考えはワークシートに書き、自分の考えがどう深まったのか、あるいは授業の中で印象に残った仲間の発言や考えを記録して、気持ちの整理や変化、成長を振り返られるようにしましょう。

・学期ごと、授業を担当する教員が替わります。

・月１回ほど全校道徳を行う予定です（事前に連絡します）。
１年生から３年生が一緒に考えを深めていきましょう。

・授業を受けるとき、大事なことは「自分事」にすることです。
物語や違い国・地域の話などの資料と出会います。資料を読んで、話し合って、考えたことを今の自分の生活とどうつながるかな？と考えることを大切にしましょう。
そして、感じたことや考えたことを踏まえて、今の自分がどう行動するかも大事です。自分の言葉、行動、考え方に生かせることは生かしていきましょう。

道徳で学習する内容は２２個あります

内容項目の中で、
あなたが「気になる項目」「考えてみたい項目」
を３つ選んで、○をつけてみよう。

いろいろな考え、
いろいろな意見があるのが当たり前
その中で自分の考えを深めていきましょう

さあ、道徳の授業が始まります！

資料３　本時案

（１）主　眼

友達とお互いの「よさ」を見つけ合う場面で、全校で編成したグループ内で「自分のよさ」について考えたり、「友達のよさ」を伝えたりする活動を通して、今まで気づけなかった自分のよさについて多面的・多角的に知り、自分の個性をさらに伸ばす大切さに気づく心情を育てる。

（２）指導上の留意点

・自分のよさをすべて選択する生徒には、特にどこがよい要素なのかを考えるように声掛けをする。
・教師は各グループに入り、よさを見つける視点を示す役として参加する。進行は生徒に委ねる。

（３）展　開

段階	学習内容	・予想される生徒の姿	○教師の指導・支援　評価	時間	備　考
導入	１　主題を捉え、全校で友達のよさを考えることに取り組み、最後は自分のよさに気づけることを理解する。	主　題：新しい自分のよさをみつけよう。 ・今日は自分のよさについて考えるんだ。 ・山崎先生のよいところか、何だろうね。声が大きいところ？ ・友達に教えてもらえると自分じゃ分からなかったよさに気づけるのか。 ・全校で友達のよさを考えるんだね。	○今日の主題を確認し、生徒に授業者のよい所を発表してもらい、自分では気づけなかったことを全体に共有する。 ○２、３年生は１年生の時にも同じ内容の授業をしているが、全校で友達のよさを考えると最終的に自分では気づけなかった新たな自分のよさに気づくことを伝える。	５分	
追究	２　自分のよさについて考える。 ３　グループ内の友達のよさについて考え、自分では気付けない自	・自分のよさはあまり考えたことがないな。１年生の時に考えたけど、そのときと違っているかも。 ・私は相談に乗ることが多いからそれもよさなのかな。 ・普段は友達のよさなんてあまり考えることないから、難しぞ。 ・先輩のよさって、いつでも後輩のことを考えてくれているところだよね。	○学習カードを配付し、手順を確認する。 ○①自分のよさを学習カードの例から選び、例以外の内容なら自分の言葉で、個人で学習カードに記入する。 ○②グループ内全員に対して、よい所を①のように付箋に３つ記入して友達に渡す。 ○③自分のよさと②で受け取った付箋を学習シートの枠内の該当箇所に分類して記	10分 15分	学習カード 付箋

	分のよさを知る。 4　自分では気づけない自分のよさを知って、感じたことを考え、グループ内で共有する。	・周りの友達は自分は責任感があると思ってくれているんだ。自分の考えと同じだ。 ・信頼できるって自分では思えなかったけど、実はそうなのかな。 **中心発問：自分では気がついていない「よさ」を知って、あなたはどんなことを思いましたか？** ・自分にはあまりよいところはないと思っていたけど、周りの友達がよい所を考えてくれていて嬉しかった。 ・自分は落ち着きがないと思っていたけど話が面白いと思ってくれていたのが意外だった。 ・自分が友達に伝えたよさが実は本人も気付いていなかったことだったんだね。 ・中１のときに考えた自分のよさより、よい所が増えたなと感じました。	入したり、貼ったりする。 ○他者に知られたくない内容などは無理に書く必要がないこと、周囲に学習カードを見せる必要がないことを伝える。 ○学習カードにまとめた内容を踏まえて、中心発問を問い掛け、個人で学習カードに記入する場面を設定する。 ○自分が、「意外だ」と感じたことを反映するとよいことを伝える。 ○全校が記入し終えた様子を確認してから、グループ内で発表する場面を設定する。司会は基本中３に依頼する。	8分 7分	
まとめ	4　自分のよさを知ることの意味を考える。	・自分はこれでよいんだと思えることができた。 ・友達のよいところをこれからも見つけたいと思った。 ・あまり自信をもてないけど、周りの人からも認めてもらえるように、教えてもらったよさを伸ばしていきたい。	○今日知った、考えた自分のよさを、あなたはこれからの生活にどのように生かしていくかを問い掛け、個人で記入する場面を設定する。 ○自己肯定感の大切さについて考えている生徒の記述を全体で共有する。	5分	学習カード

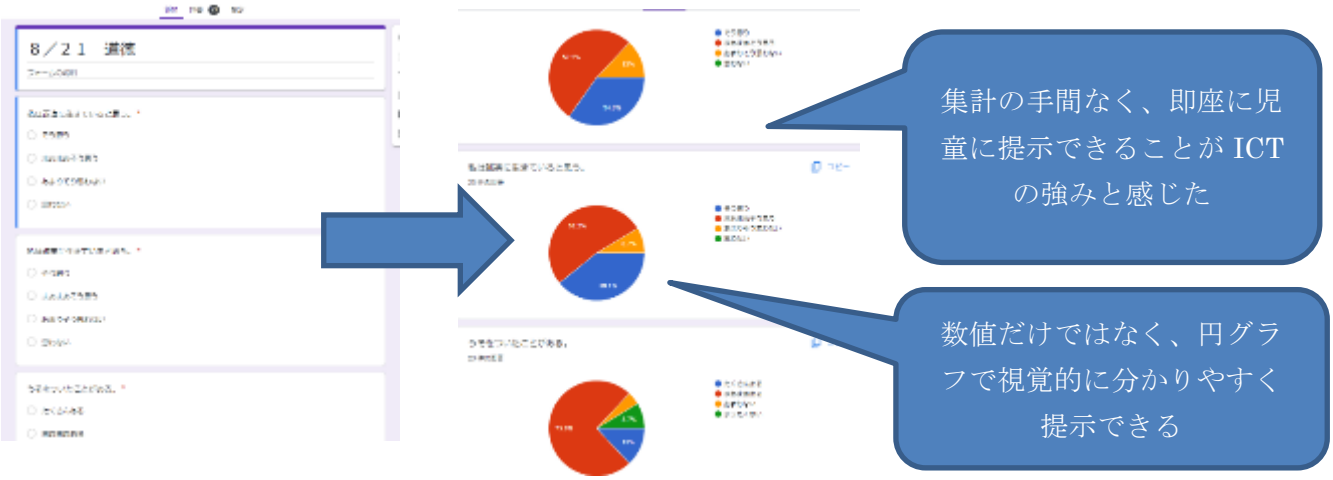
評価の視点：下記について、認め励ます個人内評価として把握する（１時間を通して）
今まで気づけなかった自分のよさについて多面的・多角的に知り、自分の個性をさらに伸ばしていくことの大切さに気づこうとしている。

２．「考え、議論する道徳」を目指して

（武石小　手塚）

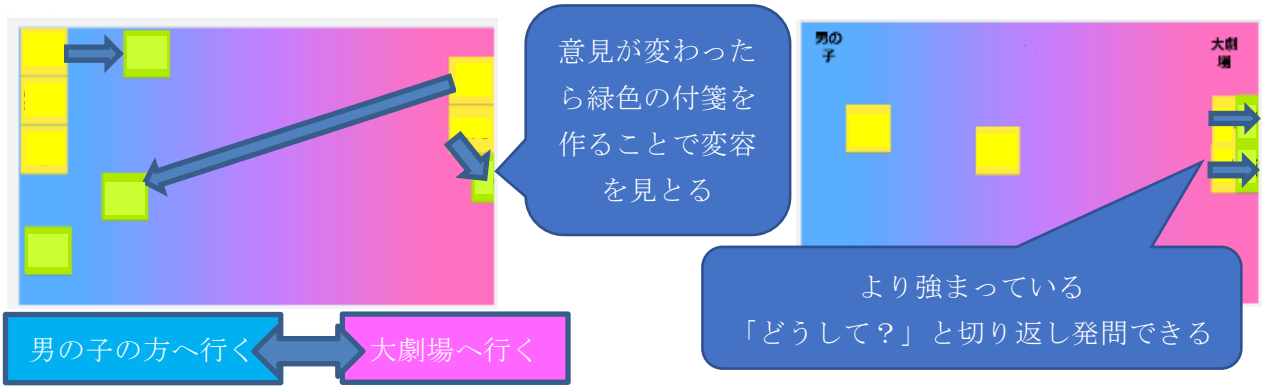
（１）内容項目へ方向づけるための『アンケート』（ICT 活用）

授業の導入において、タブレットを活用し、その授業の内容項目に沿ったアンケートを実施し、児童自身について振り返る場を作り、話し合いに気持ちを向けられるようにする。



（２）心を「見える化」するための『心のバロメーター』（ICT 活用）

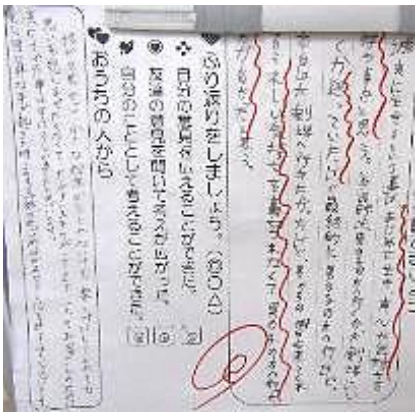
主に本時の主発問や「もし自分だったら」と自己に置き換える場面にて活用する。自分の立場をはっきりとさせたり、自己の微妙な心の揺れ動きを可視化させたりするのに使う。これをもとに、子どもの微妙な心の在り方を表現しやすくすることで、話し合いがより活発になるようにする。

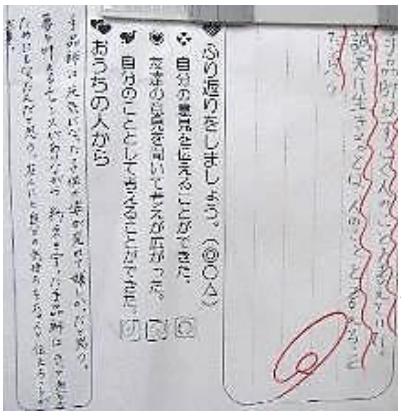


（３）『ワークシート』の形式を統一、『道徳ファイル』の作成

毎回のワークシートの形式を統一することで、児童が本時で考えたことや現時点での納得解を記入することができるようにする。それを一年間で積み重ねていくことで自身の考えの変容や歩みをたどることができるようにする。毎回のワークシート作成作業も減り、業務削減にもつながる。

また、ワークシートを『児童のみ版』と『保護者あり版』の２つを作成した。『保護者あり版』では４回に１回（月に約１回）家庭へ持ち帰り、保護者にコメントをもらってくる。児童と保護者で対話したり、コメントを見たりすることにより、児童間同士だけでなく、保護者との考えの違いを味わえるようにする。

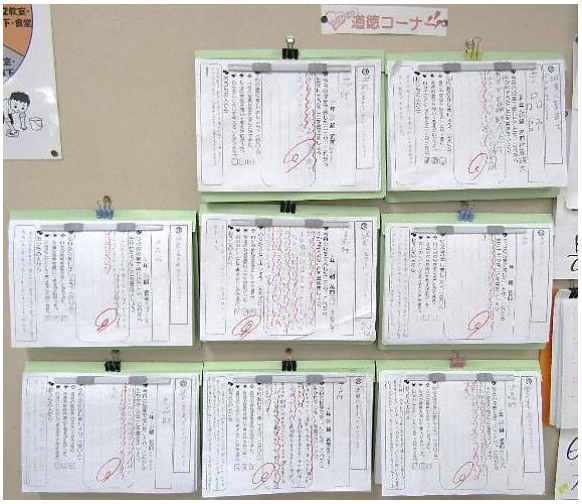




なかなか熱いメッセージをくださり、教師自身が勉強になることがある

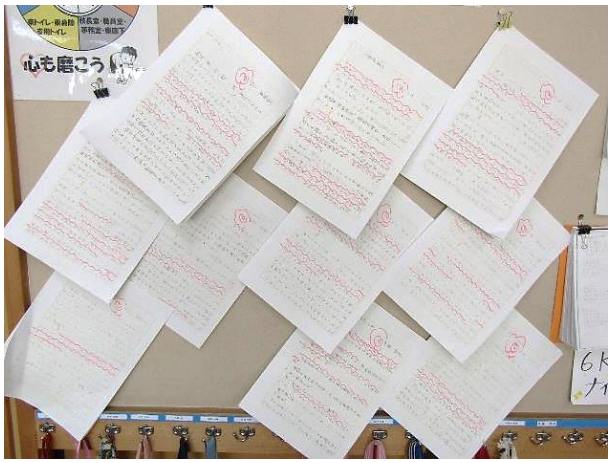
（４）学級経営『道徳コーナー』の設置

クラスの壁の一部に道徳コーナーを設置した。これにより、本時のねらうべき価値に近づいているものや、多様な考えを共有する。「選ばれた！」と喜ぶ児童もおり、道徳への意欲化にも一役買っている。



▼「私の道を～高橋くら子の生き方～」のワークシート

▼人権作文人権教育



３．自分を振り返り、生活につながる道徳を目指して

（中塩田小　小林）

（１）主　　題　「相手の気持ちに寄り添って」　　資料名　「ゆうきの心配」
　　内容項目　親切、思いやり（B7）　　出　典　「新訂新しいどうとく④」　東京書籍

①主題設定の理由

今年度は小学４年生の担任をしている。昨年度から一緒に生活しており、２年目となる。子どもたちは非常に活発で、男女共に仲が良い。誰と班を組んでも相手のことを理解しようとしたり、スムーズに活動を進めようとしたりする姿がある。その一方で、慣れきってしまい、人任せになってしまうことや授業の中では一生懸命考えていても、生活の中ではトラブルになってしまうことも多い。そこで今回は“思いやり”について、資料を読み、改めて誰かを思いやるとはどのようなことなのか友だちと考えを共有しながら自分なりの考えを深められるようにしたいと思い、本主題を設定した。

②教材のあらすじ

小学４年生の“ゆうき”は、地域のサッカーチームに入って頑張っている。ある日、サッカーで６年生の“まこと”と“一郎”がぶつかってしまい、“まこと”が怪我をする。“まこと”を心配した“ゆうき”が声をかけるが、ぶつかった友だちのために怪我を隠そうとする“まこと”の気持ちに寄り添うというお話である。

（２）展開

《導入》

・思いやりとは、どのようなことをいうのか考える。
・全体で確認し、今の時点で考えられる思いやりについて共有する。

《展開》

・教材を読みながら、登場人物がどんな思いだったのか考え、共有していく。
・“まこと”との関わりから葛藤もありながら、相手の気持ちをくみ取ろうと変化していく“ゆうき”の気持ちに気づくことができるようにする。

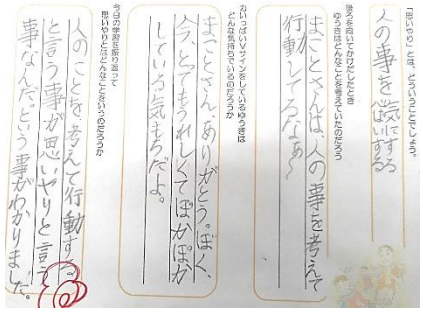
発問１　後ろを向いてかけ出したとき、ゆうきはどんなことを考えていたのだろうか。
発問２（中心発問）力いっぱいＶサインをしているゆうきはどんな気持ちでいるのだろうか。

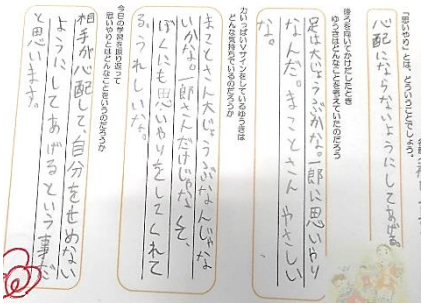
《発問１、２の後の児童の様子》

・自分の思っていることが相手も同じとは限らず、相手の思いに寄り添って声をかけたり、関わったりすることが大切なのだと気づく。

《振り返り》

発問３　手のことを考えて、親切にしてよかったと思うことがあるか。
発問４　思いやりとはどんなことをいうのだろうか。
　　→導入でも同じ質問をしている。考え方が変わったり、新たに考えたりしたことを出す。





（３）児童の様子

・“まこと”、“一郎”、“ゆうき”のそれぞれの気持ちになって考えることができた。
・怪我をした“まこと”がなぜ黙っていたのか、最初は理解できない児童もいた。怪我をしているのだから、怒りたくなるという思いを持っていた。だが、友だちの考えを聞く中で、それが相手のためを思っての行動だということに気づく姿があった。
・“まこと”の思いやりは“一郎”に対してだけではなく、“ゆうき”にも心配させまいと思う優しさがあったことに気づいていた。
・“ゆうき”の気持ちになって考えたとき、“まこと”の行動に自分の心が動かされ、温かい気持ちになっていた。

（４）授業を行ってみて

・導入で思いやりについて聞くと、「やさしい」「親切にする」など普段の生活を思い出しながら答えている児童が多くいた。それも大切なことではあるが、今回はさらに踏み込んで「相手の思いをくみ取る」ということも思いやりであることに気がついてほしかったのでその部分は達成できたといえる。普段から誰かに優しくしたり、困っている人に声をかけたりすることができる子どもたちだが、相手のことを思って怪我のことを言わなかった“ゆうき”の行動は子どもたちにとって新鮮だったのではないかと思う。一面的な見方や「思いやり」について固定的な考えをしがちな子どもたちに様々な見方や考え方に触れられるような資料に触れることは多角的、多面的な見方をするために有効である。

・授業の展開で、【自分の行動を振り返る→資料から考える→再度自分を振り返る】という流れを大切にしているが、子どもたちにとってより自分のこととして振り返ることにつながっていると考えられる。最初は抽象的に見ていたことも、資料や友だちの考えを聞くことで、自分の生活につなげて自身の具体的な姿を思い浮かべ、振り返る子どもたちが増えてきた。

（５）おわりに

今回、改めて道徳の学びについて考える機会をいただき、子どもたちと道徳、また自分と道徳の向き合い方について見直すことができた。

自分の生活を振り返ったり、自分の思いを自分の言葉で表現したりすることは、友だちの多面的、多角的な考えに触れ、自身の考えを広げ深めることにつながり、生きていく上でとても大切な力であると考える。そのためにも自分の思いがより相手に伝わるようにしていかなくてはならない。子どもたちの言葉の引き出しを増やし、様々な言葉を使って伝える力をつけていくことが今後の課題であると感じた。

個人テーマを「自分を振り返り、生活につながる道徳を目指して」としたが、学習したことがすぐに生活に活きる子どももいれば、そうでない子どももいる。私は子どもたちと共に考え、様々な思いを共有することを通して、いつか「あのときの友だちの思いはこういうことだったのか」「そういえばこんなこと勉強したな」と思い出してくれることを願っている。

４．子どもたちが自分事として考え、道徳的価値を理解するための授業の工夫
～　Google form とジャムボードを活用して　～

（清明小　矢野）

（１）主　　題　「正直のよさ」　　資料名　「さるへいと　立てふだ」
　　内容項目　正直、誠実（A2）　出　典　「新訂新しいどうとく②」　東京書籍

（２）ねらい

うそをついたり、ごまかしたりしないで、明るい心で生活しようとする判断力を育てる。

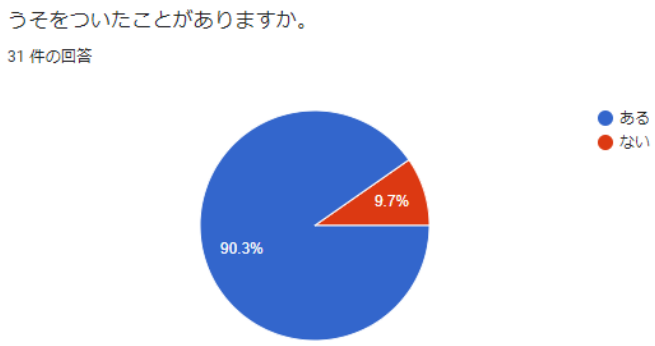
（３）本題材を選んだ理由

本教材は、食べごろのかきを独り占めするためにうそをつく「さるへい」と、そのうそを見破り、「さるへい」のふりをして立札に書き換えをする何者かとの不思議なやりとりが描かれた読み物教材である。

学級の児童の中には、友だちとのやりとりでうまくいかず喧嘩になってしまった時や担任が提出物の確認を行う場面など、自分の都合の良いようにうそを言ったりごまかしをしたりする児童がいる。うそやごまかしをせずに、正直な心で生活することが自分自身や相手にとっても気持ちの良いことであるとともに、いけないことをしてしまった時には、素直にその非を認め、あやまることができるようになってほしいと願い、本教材を用いて授業を行った。

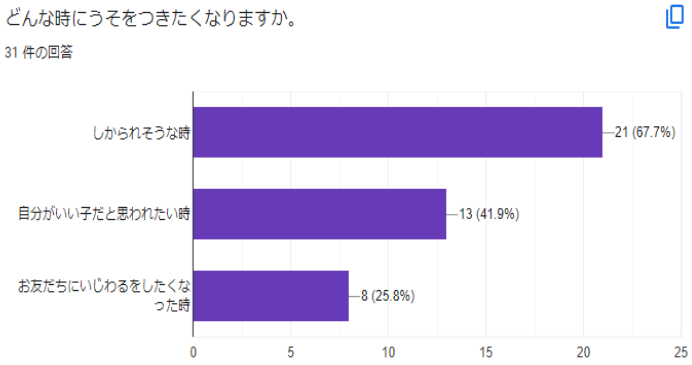
（４）導入場面で用いた Google form のアンケートと結果

質問項目①　うそをついたことがありますか。



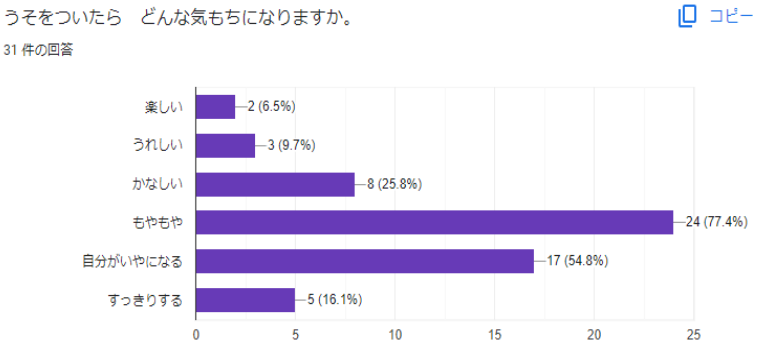
うそをついたことがある、ないについて児童の 90%以上が、うそをついたことがあると回答した。回答をする際には、「学校以外でもいいの？」「最近しちゃったことあったな。」などのつぶやきがあり、自分の生活を振り返って考える姿が見られた。

質問項目②　どんな時にうそをつきたくなりますか。（つくと思いますか。）



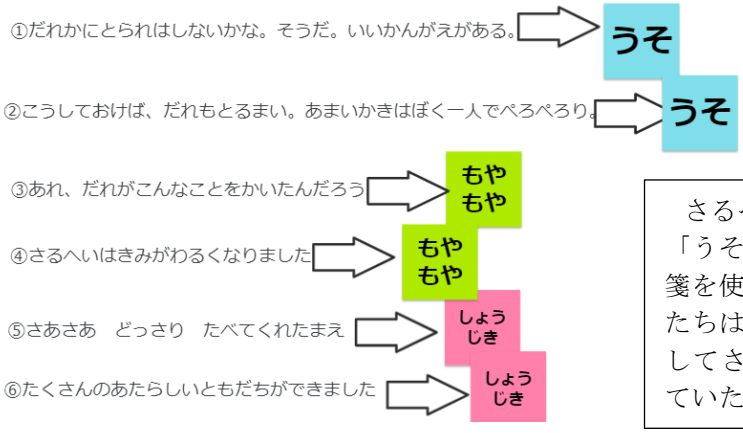
どんな時にうそをつきたくなるか（つくと思うか）という質問の選択肢は
・叱られそうな時
・自分がいい子だと思われたい時
・お友だちにいじわるをしたくなった時
の３つで、複数回答可に設定した。
「やっぱり叱られそうな時が一番だな」と正直に回答している児童の姿が見られた。具体的な場面として、「やるべきことをしていなくて叱られそうになるとうそをつきたくなる」と話した。

質問項目③　うそをついたら　どんな気もちになりますか。



うそをついたら　どんな気もちになりますか（なると思いますか。）という質問の選択肢は
・楽しい　　・うれしい
・かなしい　　・もやもや
・自分がいやになる　・すっきりする
の６つで、複数回答可に設定した。
楽しい、うれしいを回答した児童の「うそ」は、友だちを馬鹿にしたりする悪意のあるものではなく、友だちを驚かそうとしたものと考えられる。多くの児童が「もやもや」や「自分がいやになる」を選んだ。これはうそをついたことを後悔した経験があることを示した。

（５）展開で用いたジャムボード



さるへいの行動や台詞を①～⑥まで順に並べ、「うそ」「もやもや」「しょうじき」の３種類の付箋を使い、さるへいの心の変化を考えた。子どもたちは一人一人付箋をコピーしたり、動かしたりしてさるへいの気持ちを自分に引き寄せて考えていた。

【授業の流れ】
・Google form のアンケートに回答→みんなの回答を見る→「うそ」について考える→教師の範読
・発問１立札を立てたさるへいは、どんなことを考えましたか。（さるへいの吹き出しワークシート）
・中心発問二度目に書き換えられた立札を見て、さるへいはどんなことを考えていたでしょうか。（〃）
・発問２「どっさり食べてくれたまえ。」と言った時のさるへいは、うそをついたことをどう思っていますか。
・ふりかえり　ジャムボード→感想（ワークシート）

（８）授業を振り返って
①良かった点
・普段ワークシートだけの時にはなかなか手が進まない児童も、アンケートやジャムボードを利用するときには非常に意欲的で、回答しながら自分の経験についてもつぶやく様子を見せた。また、友だちの意見を聞いて終わった授業ではなく、自分の頭で考えた時間であったため、振り返りの感想も記入することができた。
・周りの友だちがどんな回答をしたのか、テレビに写してすぐに共有できることができた。
②課題点
・本教材で扱った「うそ」は、さるへいが自分本位で周りのことを考えず独り占めにするための悪賢い「うそ」であったが、実際には相手のことを思いやって「うそ」をつく方がよい場面もある。２年生はそこまで考えないかもしれないが、「うそは絶対にしてはいけない」という指導ではなく、今回は善悪の判断とも重なる部分を児童が理解できたかどうかを評価しなければならないと感じた。学年が上がれば、場面によってうそをつく方がお互い傷つくことなく良い関係でいられることもあるということを同時に学ぶ必要がある。うそをつく理由や、ついた時の気持ちをこちらで設定するのではなく、児童が自分で文字を打つことができればもっとより深い学びになると感じた。

５．人間関係が固定化している学習集団の中で

（青木中　山下）

（１）本校の課題　～研究テーマに関わって～
本校青木中学校も、菅平中学校と共通する点が多い。保育園からずっと一緒に過ごしてきた、関係が固定化している学習集団の中で、いかに「多面的・多角的に考えを広げ、深めていけるか」は、道徳の学習ではもちろんのこと、あらゆる学習場面や日常生活において、本校にとっても大きな課題であると感じる。
今年度の教育課程では、全校一斉授業による異年齢集団での学習というスタイルを見せていただき大変参考になり、本校でもチャレンジしてみたいと思った。ただ、私が担任をしているクラスの実情は、自己主張や自己表現が苦手な生徒が多く、言いたいことや意見があっても、なかなか言い

出せなかったり、グループなど少人数の集団を作っても、内容によっては活発な活動にならなかったりするのが課題。その上、固定化された関係の中で「あの人は〇〇だ」と決めつけた思い込みがあったり、特定の仲間に対して積極的に関わろうとしなかったりする姿があります。まずは学級内で「自分の考えをもち、相手に伝えること」「仲間との意見交換を活発にして、お互いに学び合い、深め合えること」が必要だと痛感する日々である。

よって、下記の実践を通して、今ある集団で「多面的・多角的」に学べる素地を作ることを目標に、実践してきた。

（２）令和５年度の取り組みの成果と課題

①ソーシャルスキルトレーニング（SST）

自分の考えをもち、表現し、仲間との関わり合いを豊かにするために、数回 SST を行った。ゲーム的な要素も持たせながら、仲間との関わり合い、理解し合う活動を通して、素直に「よかった」「楽しかった」という感想が聞かれました。「豊かな関係作り」につながったと感じた。

②ICT の活用

「深く考える場面」「最後のまとめや感想」などは、しっかり紙のワークシートに書かせたい、と個人的には感じているが、ちょっとした感想や、幅広く意見を出し合うような場面では、スプレッドシートや Jamboard が、手軽に、しかも大勢と一度に意見を共有することができて大変有効であった。（Jamboard は文字が見づらいこと、名前の記入が必要になることから、意見の共有はスプレッドシートを活用した。）

別の視点では、考えを持つことや、文字を書くことに支援が必要な生徒にとっても、文字を入力することが有効であった。

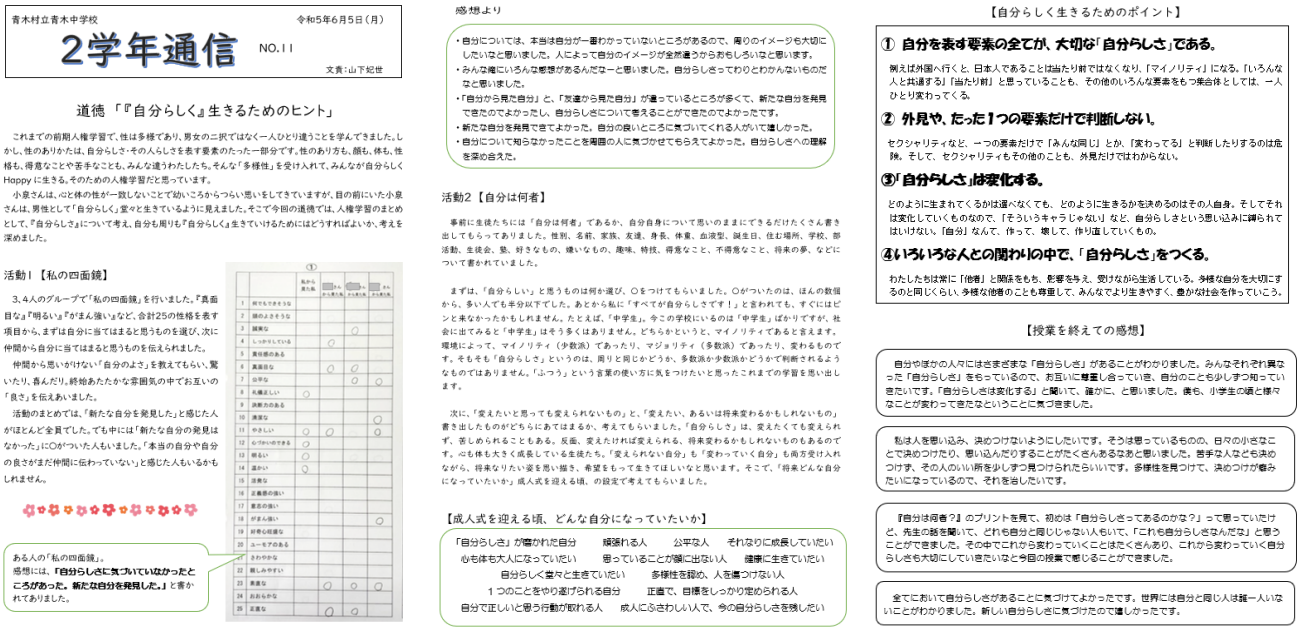
③人権同和教育との一体的な学習

人権教育月間に学んだことを、その後の道徳でも扱い、学習内容をさらに深めることができた。主にセクシャルマイノリティについて学び、「多様性」を追求した人権教育のあとで、「自分らしさ」について考え、「自分も周りも『自分らしく』生きるためにはどうすればよいか」考える授業を行い、それまでに学んできたことをベースに、「自分や仲間についての多様性を受けいれ、だれもが自分らしく生きていきたい」と思いを深めることができ。（資料『2 学年通信 No. 11』）

④学年職員全員による授業

本校は複数担任制であることから、担任２人が交代して授業を行い、副任の先生にも授業をしていただいた。それだけでも、生徒にとっては新鮮で、学び深かったことと思う。いろいろな大人と関わること自体が「多面的・多角的」な見方につながると思う。

【資料】



青木村立青木中学校　令和5年6月5日（月）

2学年通信　NO.11

文責：山下紀世

道徳　「『自分らしく』生きるためのヒント」

これまでの前期人権学習で、性は多様であり、男女の二択ではなく一人ひとり違うことを学んできました。しかし、性のありかたは、自分らしさ・その人らしさを表す要素のたった一部分です。性のありかた、顔も、体も、性格も、得意なことや苦手なことも、みんな違うわたしたち。そんな「多様性」を受け入れて、みんなが自分らしくHappy に生きる。そのための人権学習だと思っています。

小泉さんは、心と体の性が一致しないことで幼いころからつらい思いをしてきていますが、目の前にいた小泉さんは、男性として「自分らしく」堂々と生きているように見えました。そこで今回の道徳では、人権学習のまとめとして、『自分らしさ』について考え、自分も周りも『自分らしく』生きていけるためにはどうすればよいか、考えを深めました。

活動１【私の四面鏡】

3、4人のグループで「私の四面鏡」を行いました。『真面目な』『明るい』『がまん強い』など、合計25の性格を表す項目から、まずは自分に当てはまると思うものを選び、次に仲間から自分に当てはまると思うものを伝えられました。

仲間から思いがけない「自分のよさ」を教えてもらい、驚いたり、喜んだり、終始あたたかな雰囲気の中でお互いの「良さ」を伝えあいました。

活動のまとめでは、「新たな自分を発見した」と感じた人がほとんど全員でした。でも中には「新たな自分の発見はなかった」に〇がついた人もいました。「本当の自分や自分の良さがまだ仲間に伝わっていない」と感じた人もいるかもしれません。

ある人の「私の四面鏡」。
感想には、**「自分らしさに気づいていなかったところがあった。新たな自分を発見した。」**と書かれてありました。

		私から見た私				友達から見た私				本当の私			
1	何でもできそうな												
2	頭のよさそうな												
3	謙虚な							○					
4	しっかりしている					○							
5	責任感のある												
6	真面目な					○		○					
7	心平な							○		○			
8	礼儀正しい		○										
9	決断力のある												
10	清潔な											○	
11	やさしい		○		○							○	
12	ものごとにかたまる	○											
13	明るい	○											
14	温かい	○											
15	活発な												
16	正義感の強い												
17	意志の強い												
18	がまん強い											○	
19	好奇心旺盛な												
20	ユーモアのある												
21	さわやかな												
22	親しみやすい												
23	素直な					○				○		○	
24	おおらかな												
25	正直な					○		○					

感想より

- 自分については、本当は自分が一番わかっていないところがあるので、周りのイメージも大切にしたいなと思いました。人によって自分のイメージが全然違うからおもしろいなと思います。
- みんな俺にいろんな感想があるんだなーと思いました。自分らしさってわりとわかんないものだなと思いました。
- 「自分から見た自分」と、「友達から見た自分」が違っているところが多くて、新たな自分を発見できたのでよかったし、自分らしさについて考えることができたのでよかったです。
- 新たな自分を発見できてよかった。自分の良いところに気づいてくれる人がいて嬉しかった。
- 自分について知らなかったことを周囲の人に気づかせてもらえてよかった。自分らしさへの理解を深め合えた。

活動2【自分は何者】

事前に生徒たちには『自分は何者』であるか、自分自身について思いのままにできるだけたくさん書き出してもらってありました。性別、名前、家族、友達、身長、体重、血液型、誕生日、住む場所、学校、部活動、生徒会、塾、好きなもの、嫌いなもの、趣味、特技、得意なこと、不得意なこと、将来の夢、などについて書かれていました。

まずは、「自分らしい」と思うものは何か選び、〇をつけてもらいました。〇がついたのは、ほんの数個から、多い人でも半分以下でした。あとから私に「すべてが自分らしさです！」と言われても、すぐにはピンと来なかったかもしれません。たとえば、「中学生」。今この学校にいるのは「中学生」ばかりですが、社会に出てみると「中学生」はそう多くはありません。どちらかというと、マイノリティであると言えます。環境によって、マイノリティ（少数派）であったり、マジョリティ（多数派）であったり、変わるものです。そもそも「自分らしさ」というのは、周りと同じかどうか、多数派か少数派かどうかで判断されるようなものではありません。「ふつう」という言葉の使い方に気をつけたいと思ったこれまでの学習を思い出します。

次に、「変えたいと思っても変えられないもの」と、「変えたい、あるいは将来変わるかもしれないもの」書き出したものがどちらにあてはまるか、考えてもらいました。「自分らしさ」は、変えたくても変えられず、苦しめられることもある。反面、変えたければ変えられる、将来変わるかもしれないものもあるのです。心も体も大きく成長している生徒たち。「変えられない自分」も「変わっていく自分」も両方受け入れながら、将来なりたい姿を思い描き、希望をもって生きてほしいなと思います。そこで、「将来どんな自分になっていたいか」、成人式を迎える頃、の設定で考えてもらいました。

【成人式を迎える頃、どんな自分になっていたいか】

「自分らしさ」が磨かれた自分　頑張れる人　公平な人　それなりに成長していたい
心も体も大人になっていたい　困っていることが顔に出ない人　健康に生きていたい
自分らしく堂々と生きていたい　多様性を認め、人を傷つけない人
１つのことをやり遂げられる自分　正直で、自信をしっかり定められる人
自分で正しいと思う行動が取れる人　成人にふさわしい人で、今の自分らしさを残したい

【自分らしく生きるためのポイント】

① 自分を表す要素の全てが、大切な「自分らしさ」である。

例えば外国へ行くと、日本人であることは当たり前ではなくなり、「マイノリティ」になる。「いろんな人と共通する」「当たり前」と思っていることも、その他のいろんな要素をもつ集合体としては、一人ひとり変わってくる。

② 外見や、たった１つの要素だけで判断しない。

セクシャリティなど、一つの要素だけで「みんな同じ」とか、「変わってる」と判断したりするのは危険。そして、セクシャリティもその他のことも、外見だけではわからない。

③「自分らしさ」は変化する。

どのように生まれてくるかは選べなくても、どのように生きるかを決めるのはその人自身。そしてそれは変化していくものなので、「そういうキャラじゃない」など、自分らしさという思い込みに縛られてはいけない。「自分」なんて、作って、壊して、作り直していくもの。

④いろいろな人との関わりの中で、「自分らしさ」をつくる。

わたしたちは常に「他者」と関係をもち、影響をうけ、受けながら生活している。多様な自分を大切にするのと同じくらい、多様な他者のことも尊重して、みんなでより生きやすく、豊かな社会を作っていこう。

【授業を終えての感想】

自分やほかの人々には さまざまな「自分らしさ」があることがわかりました。みんなそれぞれ異なった「自分らしさ」をもっているので、お互いに尊重し合っていき、自分のことも少しずつ知っていきたいです。「自分らしさは変化する」と聞いて、確かに、と思いました。僕も、小学生の頃と様々なことが変わって来たなということに気づきました。

私は人を思い込み、決めつけないようにしたいです。そうは思っているものの、日々の小さなことで決めつけたり、思い込んだりすることがたくさんあるなあと思いました。苦手な人なども決めつけず、その人のいい所を少しずつ見つけられたらいいです。多様性を見つけて、決めつけが薄みたいになっているので、それを当たしたいです。

『自分は何者？』のプリントを見て、初めは「自分らしさってあるのかな？」って思っていたけど、先生の話を聞いて、どれも自分と同じじゃない人もいて、「これも自分らしさなんだな」と思うことができました。その中でこれから変わっていくことはたくさんあり、これから変わっていく自分らしさも大切にしていきたいなと今回の授業で感じることができました。

全てにおいて自分らしさがあることに気づけてよかったです。世界には自分と同じ人は誰一人いないことがわかりました。新しい自分らしさに気づけたのでよかったです。

６．登場人物に思いを寄せ、多面的・多角的にとらえるきっかけづくり

（神川小　梅堀）

（１）主　　題　「友達と理解し合う」　　資料名　「ばかじゃん」
　　内容項目　友情、信頼（B10）　　出　典　「新訂新しい道徳⑥」　東京書籍

（２）この教材で授業を行うにあたって　～学級の実態から～

このクラスの友だちと過ごすのは１年半ほど。はじめは特定の友だちと過ごしたいとグループ化する女子や、まだまだ幼くて喧嘩をしてしまう男子など、自分の思いを主張する児童がいたが、６年生になるにつれて、自分本位ではなく、友だちの考えや意見を聞いたり、相手がどう思うか考えたりするような姿も、少しずつ見られるようになった。友だち付き合いがうまくいかないと悩む児童もいたが、みんなと仲良く過ごしたいという思いがあり、どうしたらいいのか考えて行動しながら、クラスの仲を深めてきた。

６年生になり、クラスの友だちと仲良く過ごせるようになってきた反面、軽々しく暴言や相手を傷つけるような発言が出ていたことが気になっていた。この「ばかじゃん」の教材を通して、自分が何気なく使っている言葉でも、相手は傷ついているということ、第三者からすると悪口に聞こえているということなどに気が付いてほしいと願いながら、この教材での授業を行った。

（３）授業の実践

①学級全体の様子

まず、この教材のタイトルにとても興味が湧いたようで、「ばかじゃんってどういうこと？」「なんでこんなこと言っちゃったのかな？」「でも、ばかって結構使っちゃってるかも…」と感じたことをつぶやいてくれた。

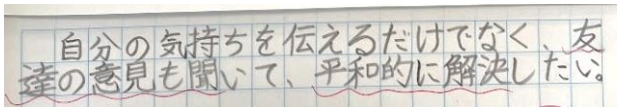
いつもの道徳の授業は私の方で読み聞かせをするが、今回は「ばかじゃん」という言葉について、子どもたちそれぞれの感じ方があるだろうと考え、自分で読んでもらった。読み終わった後に教材の内容を整理しながら子どもたちの感じたことを聞いていくと、「そんな悪口じゃなくない？」「恵里菜が気にしすぎなんだよ」とあまり大事にとらえていない児童と、「いや、でもばかはよくないでしょ」「自分もばかって言われたら傷つく」など恵里菜の思いに寄り添う児童に分かれた。かおりと話す場面では、「こんな道端で突然話しかけないよね」という意見が出たが、「いや、そこまでしても話したかったんじゃないかな？」「今までのことがずっと気になってたんだと思う」「久々に話すのって勇気がいると思うよ」と恵里菜の行動の背景を感じ取る児童もいた。「でも、おそすぎたよね。」について考える場面では、「話すのが遅すぎたんじゃないのかな」「勘違いってわかったけど、仲直りするのが遅すぎということかな」など、恵里菜とかおりが無視し続けて理解し合おうとしなかったことを後悔し、仲直りとはいえずモヤモヤ感が残ったということを共有できた。

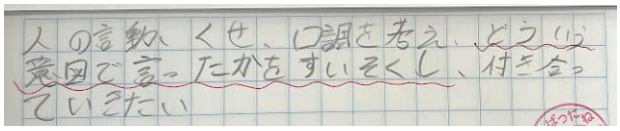
中心発問「恵里菜が真っ先にきのちゃんのところへ向かったのはなぜか」考える場面では、あまりピンときていない児童もいたので、「真っ先に」の意味についてまず考えた。「他のものにも目にくれず真っすぐにきのちゃんのところへ行くということ」「朝の準備してとか、おはようと友だちに挨拶するとか、そういうこともしないで」というニュアンスがあることを共有し、「なぜそこまでして恵里菜がきのちゃんと話したかったのか」改めて考えた。「ずっとばかじゃんって言われたことを気にしてたから」と、きのちゃんの言葉を気にしていたということ、「かおりと話したことでおそすぎたと感じたから、きのちゃんとは早く話して解決したいと思ったから」「かおりとの関係みたいに後悔しないように、一刻も早く仲直りしたいと思ったから」「かおりと話したことで勇気が出て自信がつき、きのちゃんとも話せると思ったから」と、かおりとの出来事をきっかけに今回の行動に移すことができたということを感じたようだった。恵里菜ときのちゃんはすぐにお互いのことを理解し合うことで、仲直りすることができたということが共有できた。

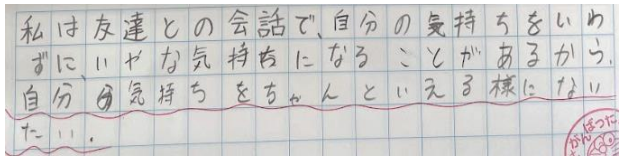
最後に恵里菜の人間像について話題になり、そこから話が広がっていった。「きっと、友だち付き合いが上手な子じゃないのかな」「前も友だち関係がうまくいかなくて転校したって書いてあったよね」「自分ならばかじゃんくらい聞き流すけど、恵里菜にとってはいやな言い方なんだね」「そんな恵里菜が勇気を出して、かおりやきのちゃんと話せたことはすごいと思う」「話すことで理解

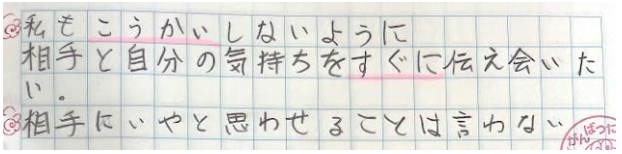
し合えてよかったね」「話しても聞いてくれない人もいるけどね（笑）」「いろんな人がいるから、話せばわかってくれる人、話してもだめだからちょっと距離を置く人とか、いろいろな関わり方があってもいい」「話さなくてもしばらくしたらなんか仲直りできたこともあるよ」恵里菜の思い・行動の背景を読み取ることで、自分の経験や行動とつなげて振り返ることができた児童もいて、今回の教材を通して、友だちと理解し合うためにどうしたらよいか考えるよいきっかけになったと感じた。

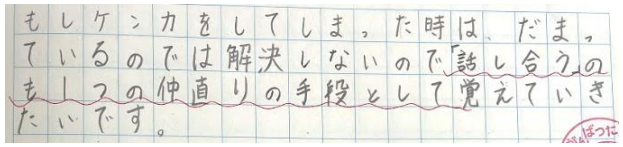
【子どもたちのふりかえりより】

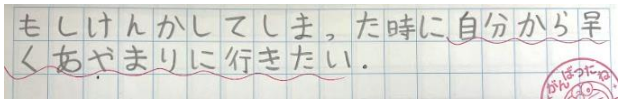

自分の気持ちを伝えるだけでなく、友達の意見も聞いて、平和的に解決したい。


人の言動、くせ、口調を考え、どういう意図で言ったかをすいそくし、付き合っていきたい


私は友達との会話で、自分の気持ちをいわずにいやな気持ちになることがあるから、自分の気持ちをちゃんといえる様にないたい。


私もこうかいしないように相手と自分の気持ちをすぐに伝え会いたい。相手にいやと思わせることは言わない


もしケンカをしてしまった時は、だまっているのでは解決しないので、話し合うのもしつの仲直りの手段として覚えていきたいです。


もしけんかしてしまった時に自分から早くあやまりに行きたい。

（２）Ｙ児の様子

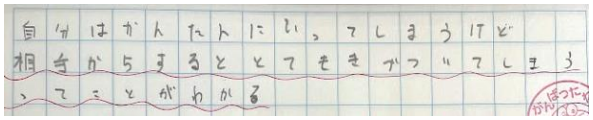
Ｙ児について、５年生当初は特定の友だちへの執着心が強く、度々友人関係でトラブルになる児童であった。特定の児童と仲良くしたいがために違う児童を仲間外れにしたり、仲良くしている児童と生徒指導案件的な物事を起こしてしまったりすることもあった。自分の思いを聞いてほしい、自分の思い通りにしたい、という気持ちが強く表れていたのかもしれない。

５年生後半からは、そのような姿は落ち着いてきて、いろいろな友だちと関われるようになってきた。男女関係なく大人数で遊んだり、話し合い活動でみんなの意見をまとめたりして、自分の思いばかりでなく、周りの友だちの反応や意見を聞き入れるような姿も見られてきた。本人の心の成長はもちろん､そんな姿に変わりつつあるＹ児のことを認めてくれた周りの友だちがいたからこそ、今、よい人間関係の中で過ごせているのだと思う。

授業では、学力についてはあまり自信がなく、机に突っ伏してしまったり、すぐに近くの友だちに聞いてしまったりすることが多いＹ児であるが、道徳の授業に関しては、自分の思いをノートに書き記すことができている。今回の授業では、「恵里菜が真っ先にきのちゃんところへ行ったのはなぜか」考える場面で、「かおりと話したことが自信になって、きのちゃんにも勇気を出して話せそうだと思った」と書き記した。恵里菜が勇気を出してかおりと話したことで、誤解していたことがわかったが、今になってはもう「おそすぎた」という後悔があったということを全体共有していたことで、Ｙ児は恵里菜が友人関係で後悔しないように、そしてかおりと話せたという事実があるからこそ自信をもってきのちゃんに話せるのではないかと考え、恵里菜の立場になって考えることができていた場面ではないかと感じた。Ｙ児も友人関係でうまくいかない時期があったので、自分の姿と重ねていた部分もあったかもしれない。その考えを授業で発表してもらったところ、他の児童も「かおりのことは後悔したから、きのちゃんのことは後悔しないようにしたかったと思う」「かおりと話したことである意味ふっきれて､きのちゃんに本当のことを聞こうと思ったかもしれない」と、Ｙ児の発言から発言が広がっていった。

最後の振り返りでは、「自分はかんたんにいってしまうけど､相手からするととてもきずついてしまうってことがわかる」とノートに書き記した。もしかしたら過去にそのような経験があったのかもしれないが、今までの自分の姿と重ね合わせて振り返ることができていたように感じた。

【Ｙ児のふりかえり】


自分はかんたんにいってしまうけど相手からするととてもきずついてしまうってことがわかる

（３）授業を終えて

この教材で授業を行ってみて、「ばかじゃん」という言葉にあまり深い意味はなく、そんなに言われても傷つかないという児童が多かった。むしろ、そんなこと気にしなくていい、言われたらスルーすればいい、と考える児童も少なくなかった。友だちとうまく付き合っていくために身につけた一つのスキルとして､気にしないことも必要だと思うが､まずはその言葉が軽々しく出てしまい、それが日常になっていることが問題だということに、子どもたちはあまり気が付いていないようだった。授業でも「その言葉はよくない」「言われたら傷つく」という児童ももちろんいたので、その発言も大いに認め、共有した。

SNS が普及し、言葉の重みをあまり考えずに発言している児童も多いように感じる。長く一緒に過ごしてきた友だち同士なので、お互いどんな性格・人柄なのかなんとなく理解し合い、言葉遣いもあまり気にせず会話しているのかもしれない。しかし、第三者から見られたとき、違う環境に置かれたとき、はたして今の言葉遣い・人間関係の構築の仕方が通用するかは難しい部分もあると感じる。道徳の授業を通して、多面的・多角的な目線で考えることの大切さを改めて感じた授業となった。

五　研究のまとめと課題

１　研究のまとめ

教育課程では、菅平中での授業公開・授業研究会を行い、少人数校ならではの授業形態や実践を学ぶことができた。午後の研究協議会ではグループトークを行い、先生方の実践や授業の困り感を共有し、これからの道徳の授業にいかせるような内容となった。

各実践においては、研究テーマに基づき、子どもたちが「多面的・多角的に考えるため」にどんな手立てが必要か、委員それぞれの研究を行い、実践することができた。ICT を活用した実践もあり、対話的な学びを充実させる一つの手段として、有効的に活用していきたい。今後も、委員会として、よりよい指導に向けて研究し続けていきたい。

今年度は新型コロナの影響も縮小傾向にあり、直接顔を合わせての会合・授業参観の機会が増えた。やはり同じ空間で授業を参観させていただくことで、そこでどんな対話が生まれていたのか、児童生徒や授業者の表情・姿を肌で感じることができ、自分の授業の在り方を見直すきっかけになった。また、オンラインによる定期委員会、C4th を活用した情報交換など、参集による移動の負担を軽減し、話し合いの時間を充実させ、十分な情報共有を行うことができた。

２　今後の課題

「多面的・多角的に考える手立て」について、さまざまな実践が行えた一方で、子どもたちへの評価や今後につながる姿について、具体化されていない部分も見えてきた。道徳の年間計画はもちろん、道徳的価値と資料のつながりを意識し、道徳の授業を確実に行い、子どもたちの心に道徳的価値観を蓄積していけるような授業を積み重ねていきたい。今年度の菅平中での実践が、大いに今後の道徳教育において参考になると感じる。また、ICT を活用した学習形態について、どの場面で活用していくのか、よく吟味し採用していく必要もある。直接意見交流する対話的な学びも大切にしたい。

さらに、道徳の指導や評価について、どう実践したらいいかわからず困り感をもつ職員も多くいる。本委員会で学んだことを、いかにして多くの職員に知ってもらい、実践してもらうかということも今後の課題である。今年度の教育課程の研究協議会で行ったグループトークについて、たくさんの情報を得ることができたと好評であったので、来年度も引き続き行えるよう、検討していきたい。